

脇田遺跡Ⅱ

福岡県筑紫野市大字塔原所在遺跡の調査

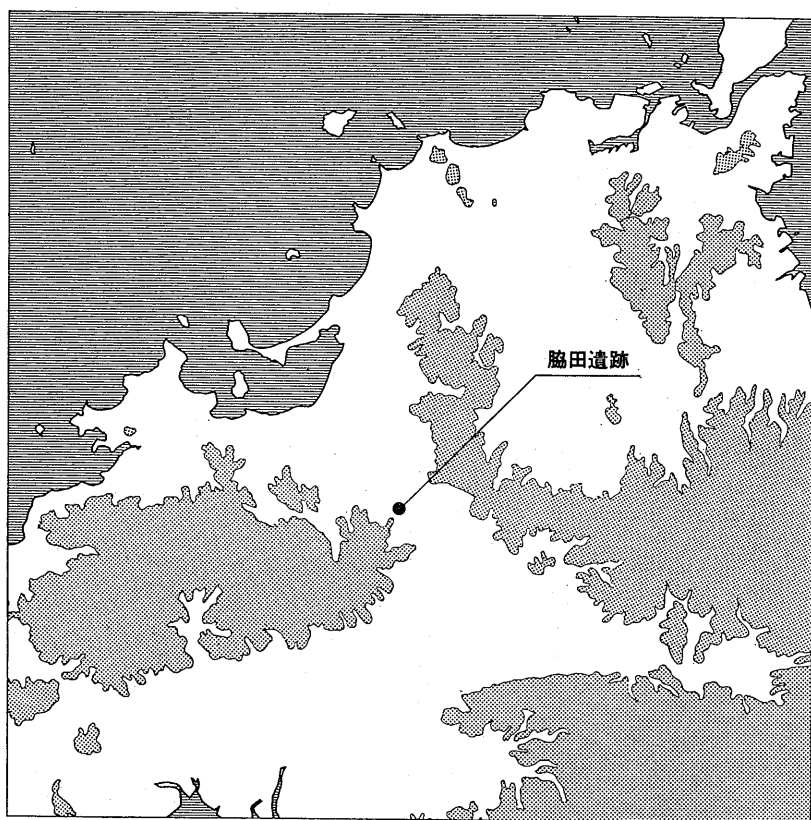
筑紫野市文化財調査報告書

第 13 集

1986

筑紫野市教育委員会

脇^{わき}田^た遺跡Ⅱ



序

筑紫野市は太古より交通の要衝として、人々の生活、生業の場として歴史の深い地であります。近年は福岡市のベッドタウン化も進み、人口も増えてまいりました。これに伴い市内各地で開発も多々行なわれ、同時に発掘調査の件数も増加しております。教育委員会では市内に温存された数多くの文化遺産の保護を行なうとともに、その活用にも努力しております。

今回、総合商事株式会社からの委託を受け、発掘調査を実施いたしました。その記録や成果を綴ったものが本書であります。本書が失われつつある遺跡の代弁者として、物言わぬ祖先の知恵や生き様を後世に伝える一助となれば望外の喜びです。

なお、発掘調査から報告書の作成に至るまで総合商事株式会社から多大の御協力をいただくと共に、調査が無事終了いたしましたのも、地元住民の方々はじめ、同社の深い御理解の賜物と考え、ここに厚くお礼申し上げます。

昭和60年11月1日

筑紫野市教育委員会
教育長 松田 康男

例 言

1. 本書は 福岡県筑紫野市大字塔原 976番地外 1850㎡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は総合商事株式会社の委託を受けて筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 実測および写真撮影はおもに奥村俊久がたった。
4. 本書の執筆・編集は奥村が行なった。

目 次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の内容	4
1. 調査概要	4
2. 弥生時代の遺構と遺物	4
(1) 1号住居跡	4
(2) 2号住居跡	4
(3) 3号住居跡	5
(4) 4号住居跡	5
(5) 5号住居跡	7
(6) 7号住居跡	8
(7) 1号貯蔵穴	8
(8) 1号土塋	8
(9) 2号土塋	9
(10) 3号土塋	9
(11) 段状遺構	12
3. 古墳時代の遺構と遺物	13
(1) 6号住居跡	13
(2) 8号住居跡	15
4 その他の遺構と遺物	16
IV ま と め	16

I 調査に至る経過

昭和60年4月、筑紫野市教育委員会は、周知の遺跡となっている筑紫野市大字塔原976番地外の山林が伐採されているのを発見し、造成を予定していた総合商事株式会社に当該地が周知の遺跡となっている旨を連絡し、協議を行なった。市教育委員会は、遺跡の概要や密度を調べるため、総合商事株式会社の委託を受け、同年4月24日に試掘調査を実施し、弥生時代の住居跡、または貯蔵穴と思われる遺構を5ヶ所に検出し、奈良時代の遺物も採集された。

試掘結果を踏まえ昭和60年5月9日、筑紫野市と総合商事株式会社との間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。市教育委員会はこれを受けて同年5月17日より7月6日まで現場での発掘調査を行ない、同年9月2日より整理・報告作業を開始した。

調査組織については下記のとおりである。

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	松田康男
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課課長	山村茂
		文化財係係長	高原健
調査	筑紫野市教育委員会 社会教育課	文化財係 主事	奥村俊久

なお、発掘調査に当り、山野洋一、渡辺和子、永野美智雄、小林康弘、新開哲士の応援を得た。

II 位置と環境

脇田遺跡は、福岡県筑紫野市大字塔原（字向原）に所在する。

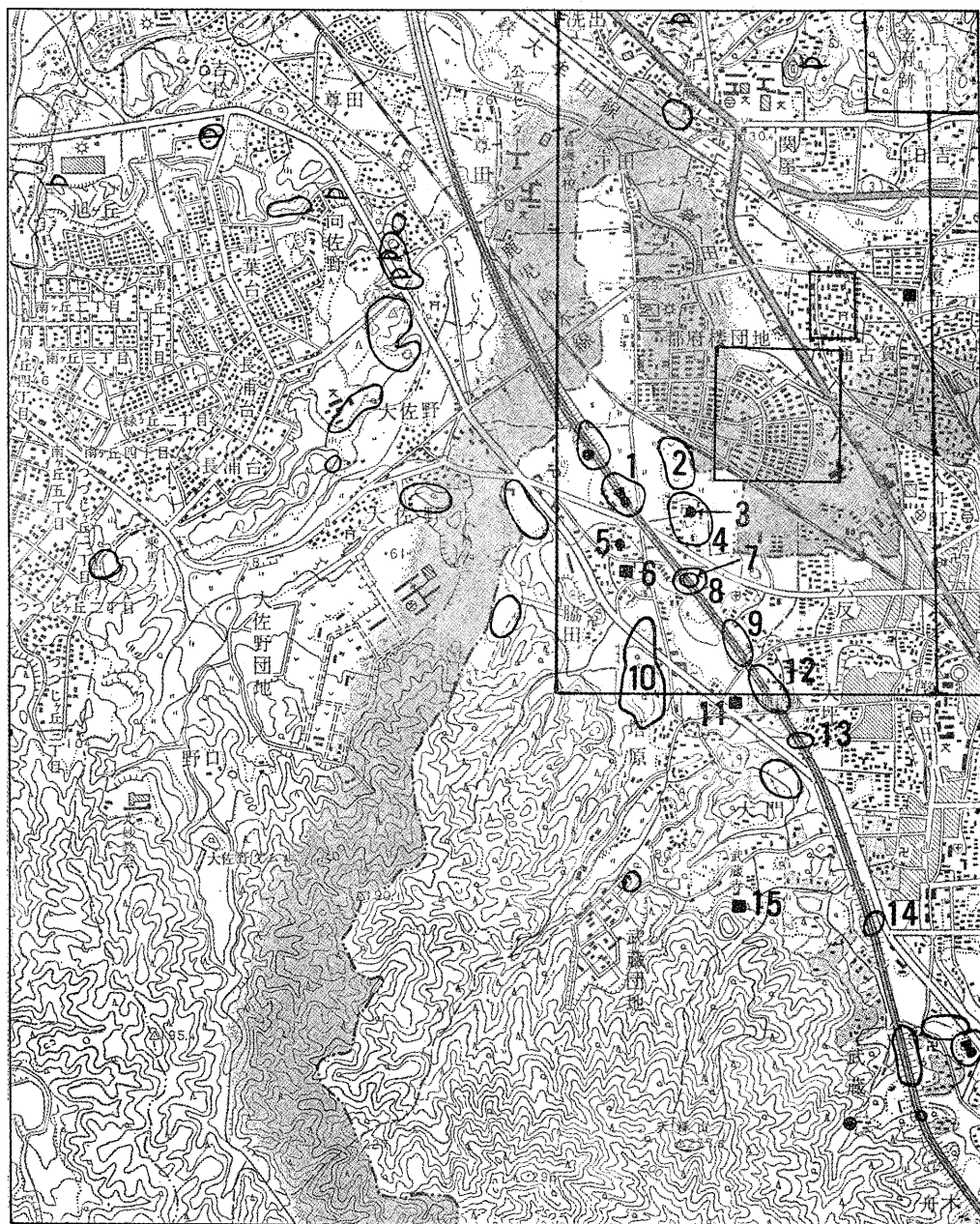
遺跡は脊振山塊の東北端にあたる北側裾部、標高55m付近に位置する。天拝山を背景に前面に福岡平野南端より続く狭長な平野を望む。

脇田遺跡は、今回調査地点より延びる標高約40m余りの台地を昭和57年に調査しており、5世紀前半代を中心とする時期の竪穴式住居跡7軒と横穴式石室を内部主体とする円墳1基が発掘調査された^{註1}。この調査地域を含む台地を便宜上A地区とし、今回調査した地域を含む標高62.7mを頂部とする小山をB地区としておく。

脇田遺跡の周辺には遺跡も多く、北側300mには杉塚廃寺^{註2}、同じく300mほど南側には塔原廃寺^{註3}といった寺院址があり、遺跡の東側を通る九州縦貫自動車道建設にあたって、剣塚遺跡^{註4}、唐人塚遺跡^{註5}、桶田山遺跡^{註6}、塔原遺跡など弥生時代から平安時代に至る時代の遺跡が発掘調査されている。

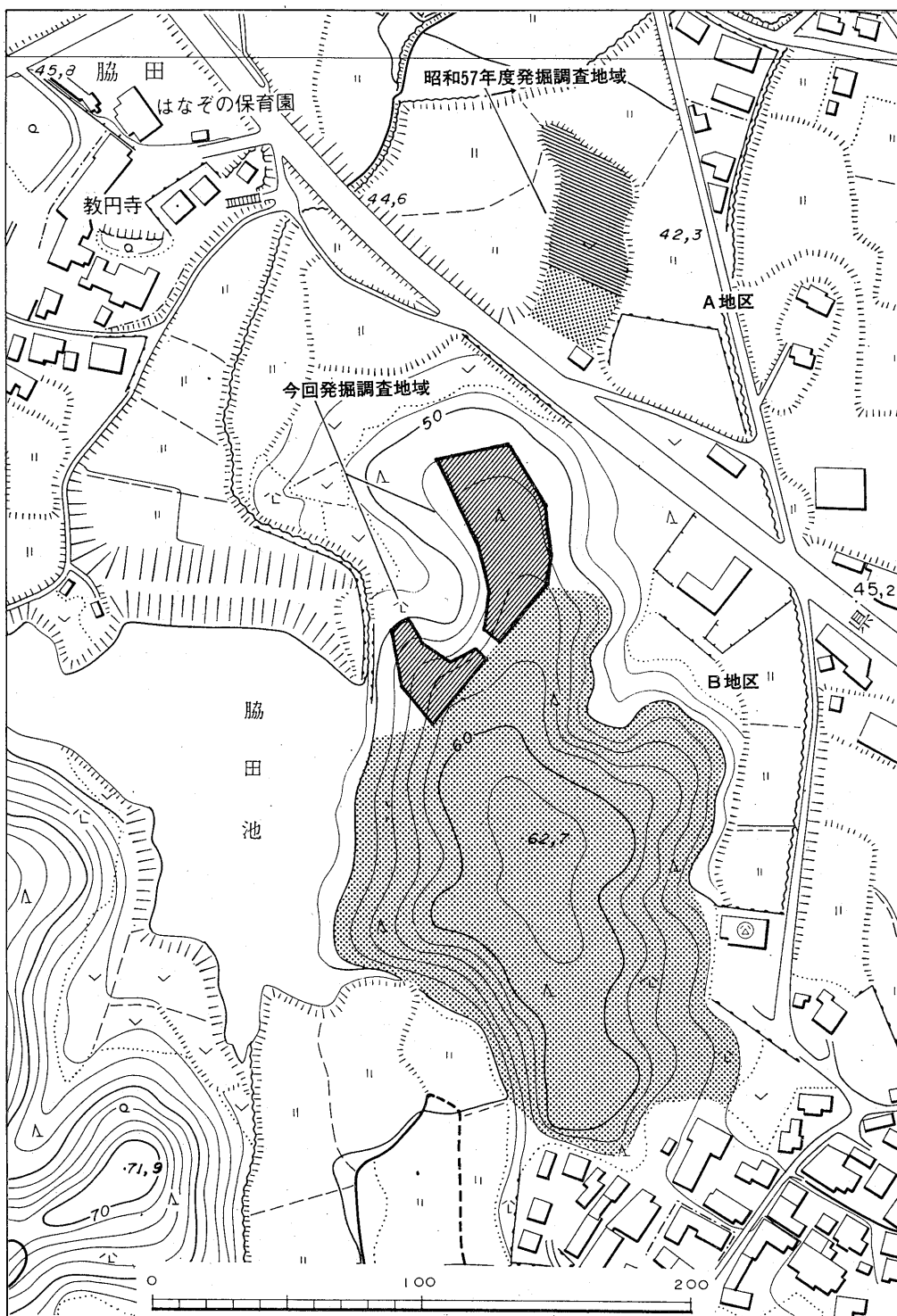
註

- 註1. 脇田遺跡 筑紫野市文化財調査報告書第9集 1984 筑紫野市教育委員会
- 註2. 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 1974 福岡県教育委員会
- 杉塚廃寺 筑紫野市文化財調査報告書第4集 1979 筑紫野市教育委員会
- 註3. 塔原廃寺 福岡県文化財調査報告書第35集 1967 福岡県教育委員会
- 註4. 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅣ 1978 福岡県教育委員会
- 註5. 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅧ 1977 福岡県教育委員会
- 註6. 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ 1975 福岡県教育委員会
- 註7. 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 1974 福岡県教育委員会



第1図 脇田遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 剣塚遺跡 2. 大坪遺跡 3. 埴安神社古墳 4. 大門遺跡 5. 杉塚古墳 6. 杉塚廃寺 7. 唐人塚遺跡
 8. 唐人塚古墳群 9. 前田遺跡 10. 脇田遺跡 11. 塔原廃寺 12. 塔原遺跡 13. 桶田山遺跡
 14. 道場山遺跡 15. 武蔵寺跡



第2図 脇田遺跡周辺地形図 (1/2,500)

Ⅲ 調査の内容

1. 調査概要

発掘調査は試掘などの結果から、北へ延びる2本の尾根頂部を中心とする約1850㎡を調査対象とした。検出された遺構は竪穴式住居跡8軒、貯蔵穴1基、土壇3基、溝状遺構3条を検出した。竪穴式住居跡は方形プランを呈すもの5軒、円形プランを呈すもの3軒で、方形プランを呈すものには比較的大形のものと、小形のものに分ける事ができる。また西側尾根の奥まった所は地山整形が行なわれていた。

2. 弥生時代の遺構と遺物

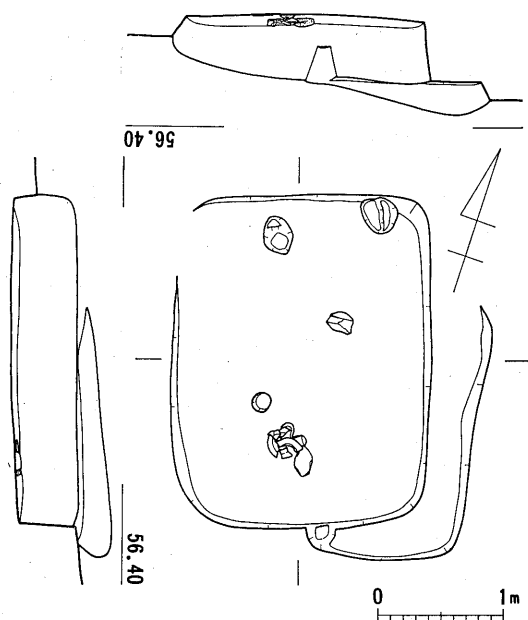
(1) 1号住居跡 (第4図)

西側尾根の西斜面に位置しているため遺構の大半を流失し、東側隅の周辺しか検出できなかったが、方形プランを呈す竪穴式住居跡と思われる。2号住居跡と切り合いをもつが前後関係は明らかにしえなかった。

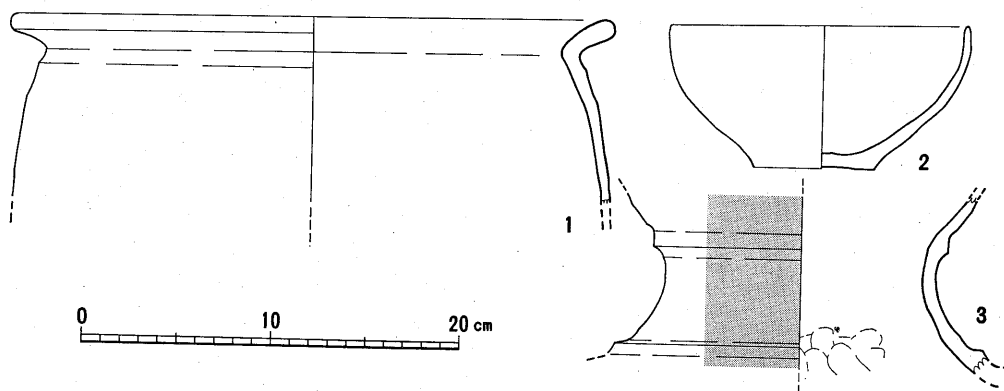
(2) 2号住居跡 (第4図・5図)

1号住居跡とほぼ同じ位置にあり、西側壁体の残りは悪い。規模は2.6m×2.1mで、プランは隅丸方形を呈す。床面南よりに土器や小礫が集まっている下にも浅いピットが認められた。

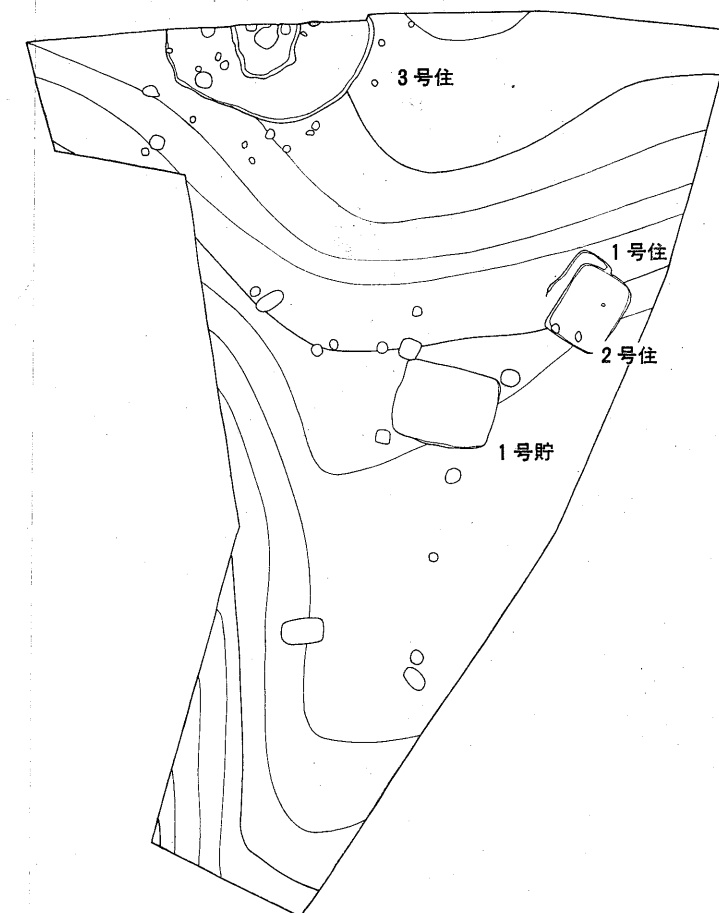
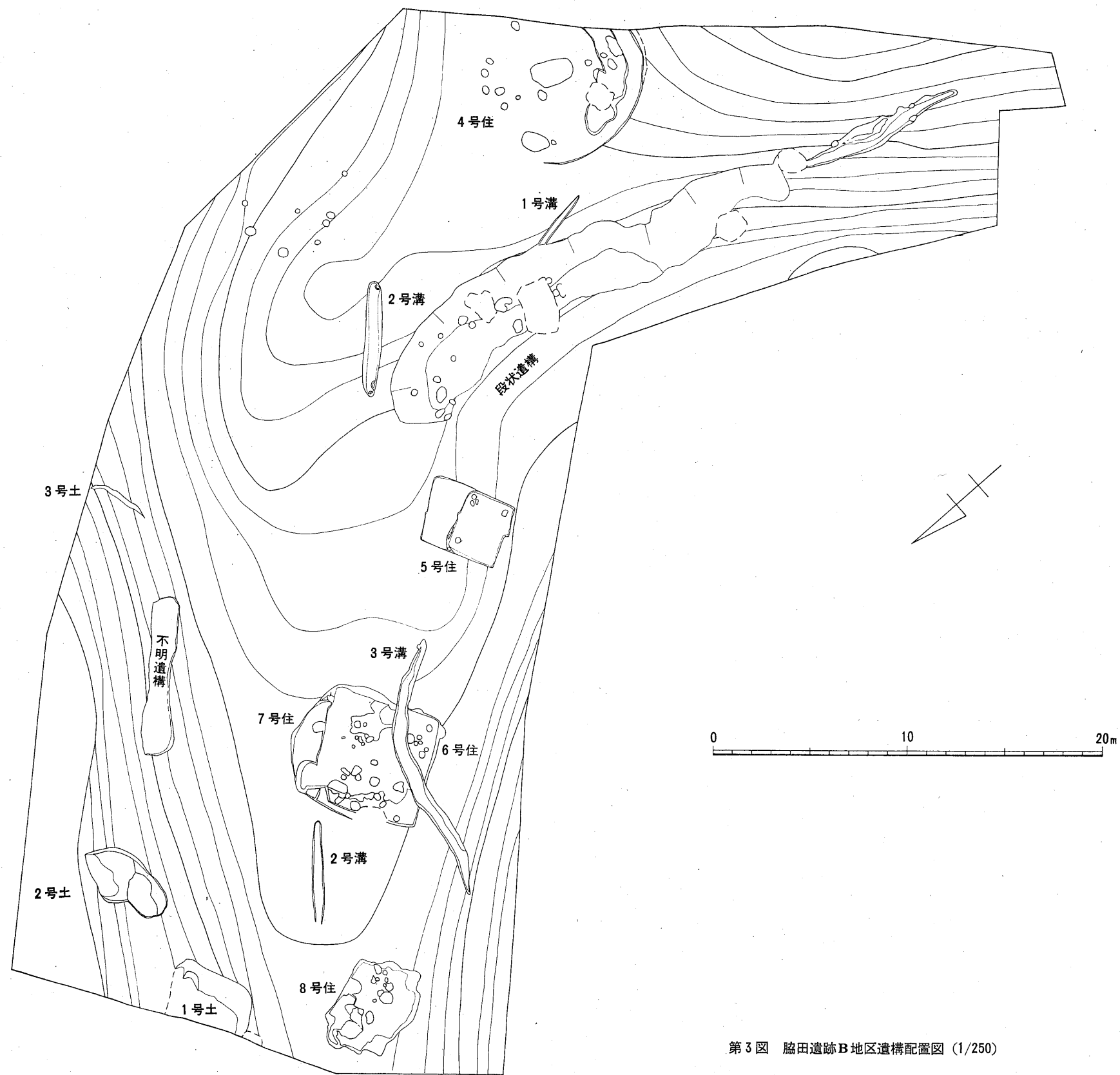
土器 1は口径32cmを測る甕である。口縁部は短かく、口頸部はやや「く」字状に近い形状



第4図 1号・2号住居跡実測図 (1/60)



第5図 2号住居跡出土土器実測図 (1/4)



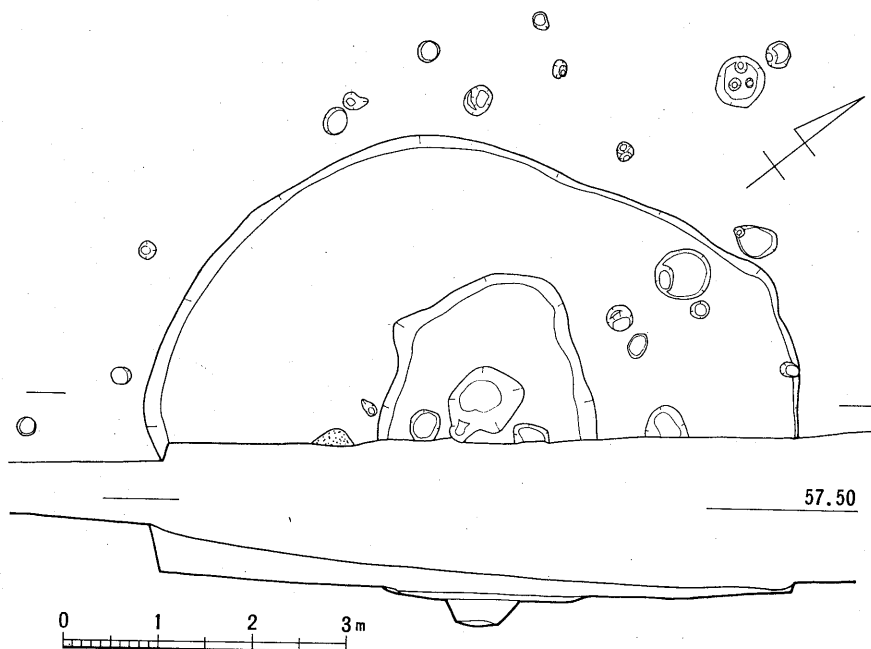
住…住居跡
貯…貯蔵穴
土…土 壌

第3図 脇田遺跡B地区遺構配置図 (1/250)

を呈す。2は口径15.8cm、器高7.7cmを測る鉢である。3は壺の頸部と推測される。くびれ部の上位と胴部との境付近に凸帯をめぐらす。外面には僅かに丹塗りが残っている。1は床面よりやや浮いて、3は床面から出土した。

(3) 3号住居跡 (第6図・7図)

西側尾根の最も奥まった所に位置し、遺構の半分は調査対象地域の外である。規模は径7mを測る。プランは円形を呈し、壁の外側にもピットが巡る。全体に遺構の残りは悪く、中央部に

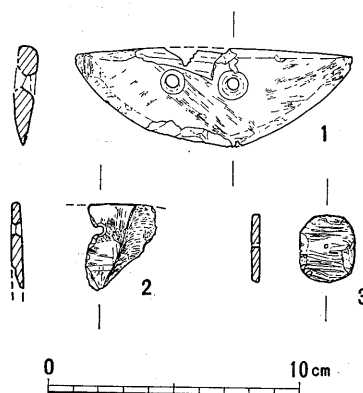


第6図 3号住居跡実測図 (1/80)

は径2m余りの浅い攪乱の窪みがある。

土器 遺構の残りが悪い事もあり、弥生時代中期から古墳時代前半にかけての小片の出土のみである。

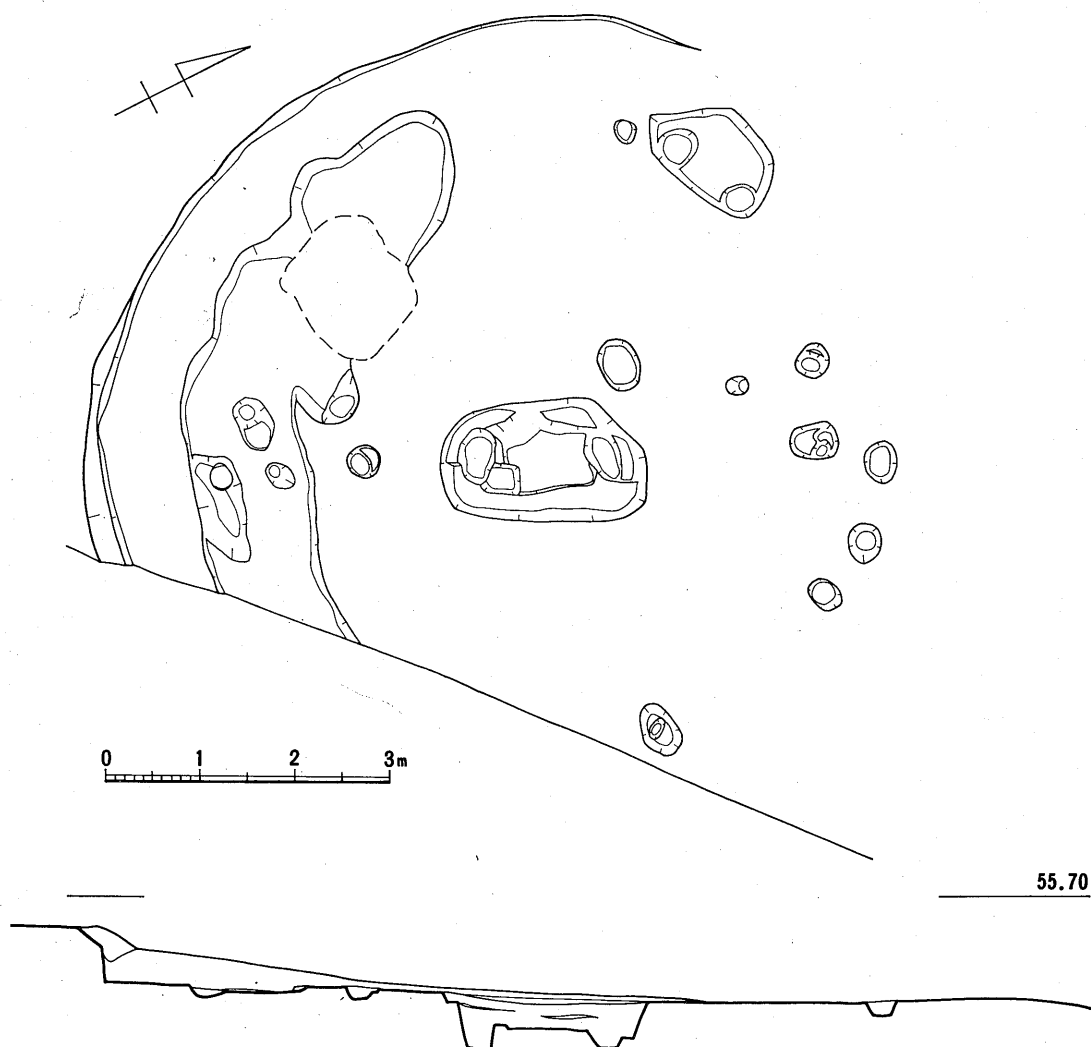
石器 1・2は砂岩製の石包丁で、いずれも両側からの穿孔である。1は全長11.1cm、幅3.9cm、厚さ0.9cmを測る。3は滑石製の有孔円板で、全長2.7cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、穿孔径1mmを測る。他にサヌカイト製のスクレイパーが出土した。



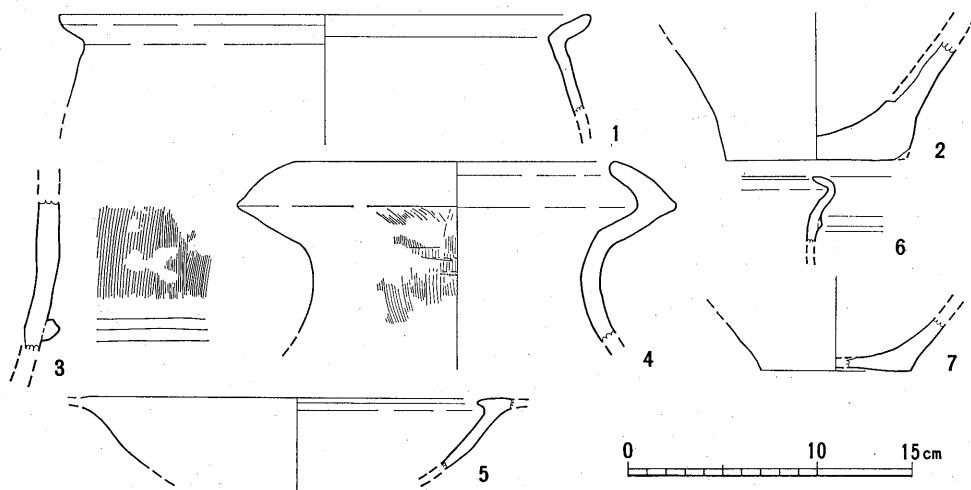
第7図 3号住居跡出土石器実測図 (1/3)

(4) 4号住居跡 (第8図・9図・10図)

東側尾根の最も奥まった所に位置し、一部は調査対象地域の外である。東半分は流失しているが、径9.7mほどの円形プランを呈す住居跡と考えられる。中央に位置すると思われる2.2×



第8图 4号住居跡実測図 (1/80)



第9图 4号住居跡出土土器実測図 (1/4)

1.3mのピットの両端に支柱穴をもつ。

土器 いずれも小片である。1は口径 28cmを測る甕で口縁部は逆L字状を呈し、平坦面が内傾する。3は大形の甕の胴部で、凸帯は胴部下位に位置するものであろう。6・7は中央ピット内からの出土で、1は袋状口縁の壺である。袋状口縁下に凸帯をめぐる。

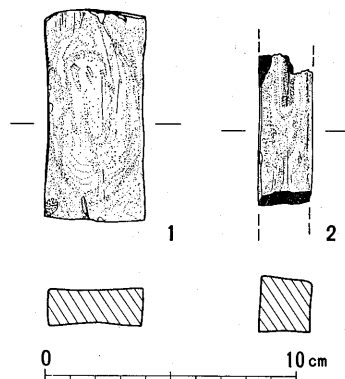
石器 いずれも砂岩製の砥石である。1は完形で全長 8.5cm、幅 4 cm、厚み 1.5cmを測り、2は両端を欠失するが、残存長6.1cm、幅2.1cm、厚み2.2cmを測る。

(5) 5号住居跡(第11図・12図)

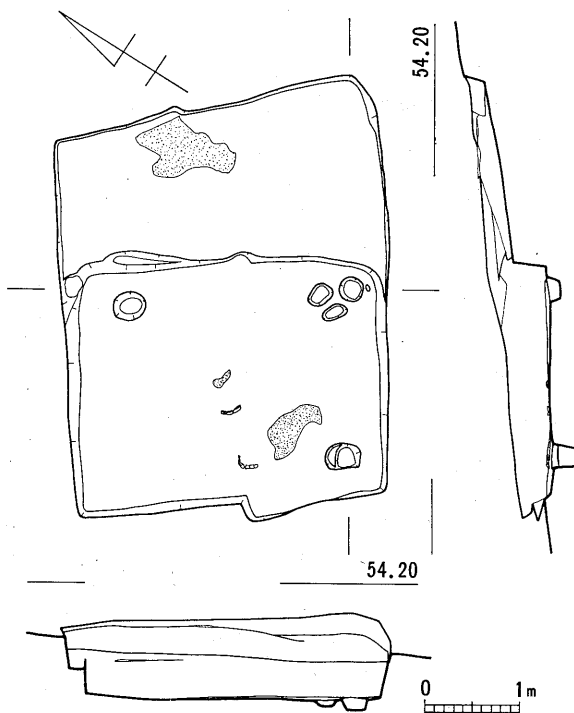
東側尾根の西斜面に位置する。3.3m×2.6mを測る 方形プランの住居跡である。床面中央に炉は検出されなかったが焼土が残り、南よりには炭が残っている。北東側にも平面住居跡の遺構があり、壁ぎわに堅くしまった焼土が残る。この遺構は隅部のプランが明瞭さを欠き、床面も傾斜、彎曲が激しいため住居跡とは考えにくいが、5号住居跡と何らかの関連も否定できない。

土器 いずれも床面からの出土である。1は口径 36.4cmを測る甕で、口縁部は逆L字状を呈し、平坦面は下方へ延びる。2は口径 15cmの鉢で、口縁部は内彎し、内外面に丹が認められる。

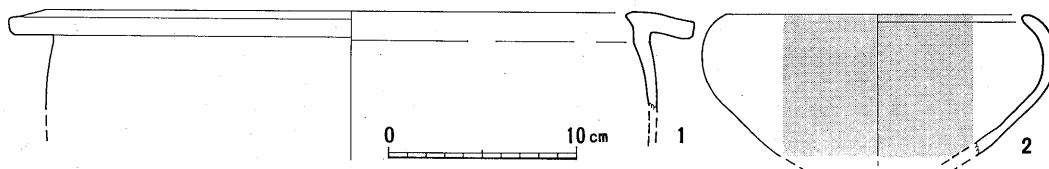
石器 床面東隅から半欠の磨石が出土した。



第10図 4号住居跡出土石器実測図(1/3)



第11図 5号住居跡実測図(1/80)

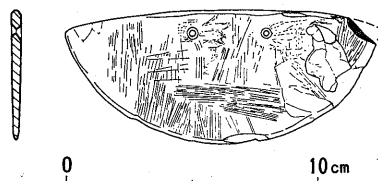


第12図 5号住居跡出土土器実測図(1/4)

(6) 7号住居跡 (第13図・22図)

東側尾根頂部に位置する。6号住居跡から遺構の大半を切られるが、径6.6m程度の円形プランを呈すと考えられる。

石器 粘ばん岩製の石包丁である。片方の端部を僅かに欠失する。残存長12.3cm、幅5.3cm、厚み4mmを測る。中ほどの2ヶ所に径2mmほどの穿孔を有す。さらに、その右側にも穿孔を試みているが、石材が剝離して不整形な穴が開いている。背縁は僅かに外彎し、3号住居跡出土例に類似した形態をもつ。

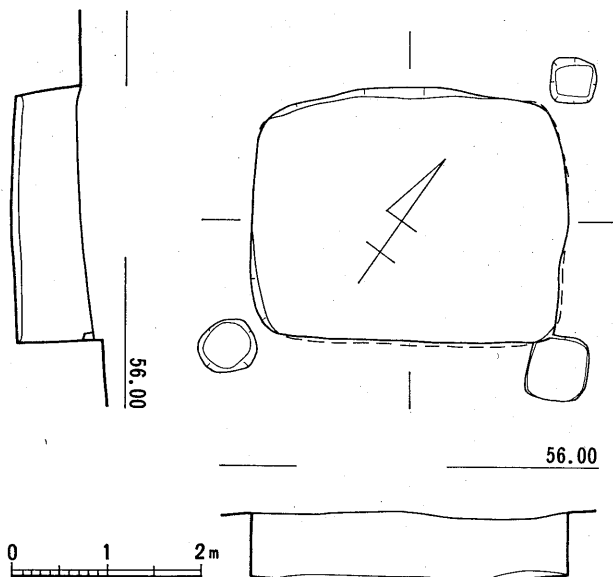


第13図 7号住居跡出土石器実測図 (1/3)

(7) 1号貯蔵穴

(第14図図版2)

西側尾根頂部で検出された3.35m×2.7mを測る方形プランを呈す貯蔵穴である。壁体はほぼ直立する。



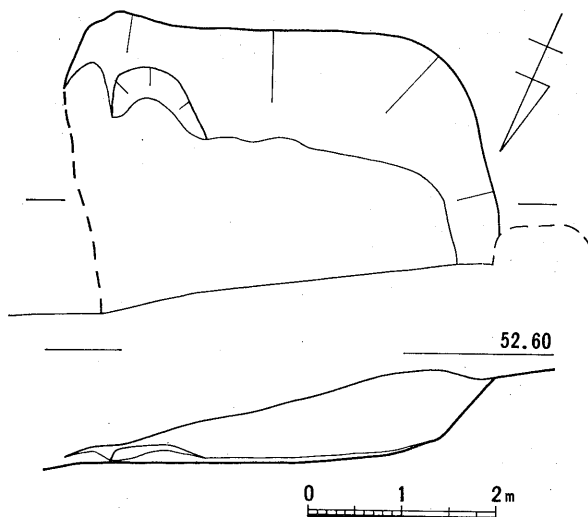
第14 図1号貯蔵穴実測図 (1/80)

遺物 弥生式土器と黒耀石が僅かに出土した。

(8) 1号土壌 (第15・18図)

東側尾根調査地域の北端に位置する。

遺構の北部は調査対象地外となり、東側は流失しているため遺構の形状などは不明確であるが、南隅周辺の状況から方形プランを呈すとも考えられる。土器1・2は口縁部が逆L字状を呈し、平坦面は内傾する甕である。1は口径30.1cmを測る。3も甕と同様の口縁部をもつ鉢で、口径28.4cmを測る。4は底径8.6cmを測る甕の底部周辺である。外面はススが付着し、赤変がある。また内面には炭化物の付着



第15図 1号土壌実測図 (1/80)

が認められた。5は口径34cmを測る壺である。口縁部は鋤先状を呈し、平坦部は外傾して長く延びる。頸部下には1条の三角凸帯を貼付し、扁球形の胴部に至る。また外面には丹が塗られる。6・7は壺の下半で、いずれも僅かに上げ底気味となる。底径は6が10cm、7が6cmを測る。

(9) 2号土壌 (第16図・18図)

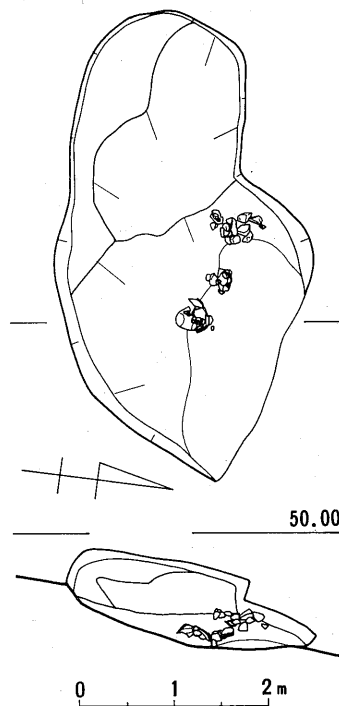
東側尾根東斜面に位置しており、遺構の残りは悪い。残存する遺構は東西に長く約5mを測る。床面も全体に傾斜している。土器は礫と伴に投棄された状態で出土した。

土器 8は口縁部が短かく、「く」字状に近い形態を呈す。口径は小片のため明確さを欠くが、14.5cm程度と思われる。9・10はいずれも甕の底部で、9は底径8.4cmで、僅かに上げ底気味となり、10は底径8cmで、僅かにレンズ状気味の底部である。11は胴部最大径26.8cmを測る壺の胴部で、胴部下位に三角凸帯がやや下向きに貼付される。外面の一部には丹が残っている。12は口径7.9cm、器高8.9cm、胴部最大径14.6cm、底径4.2cmを測る無頸の壺である。13は壺の下半で、底径10cmを測り、一部に丹が残る。

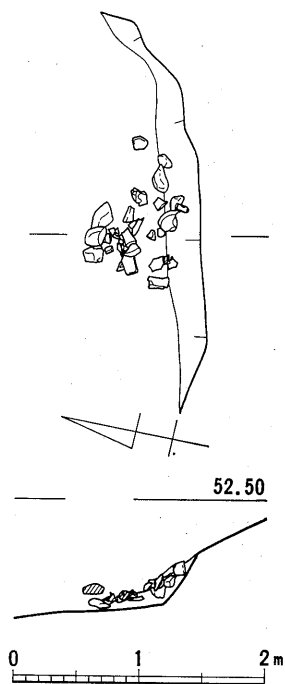
(10) 3号土壌 (第17図・19図・20図・21図)

東側尾根の東斜面で検出した。すでに大半が流失し、南側壁の一部のみがかるうじて検出された。遺構本来の状況は不明確であるが、残存する状況に限ってみるならば、2号土壌と同様に土器は礫と伴に投棄されたもののようである。

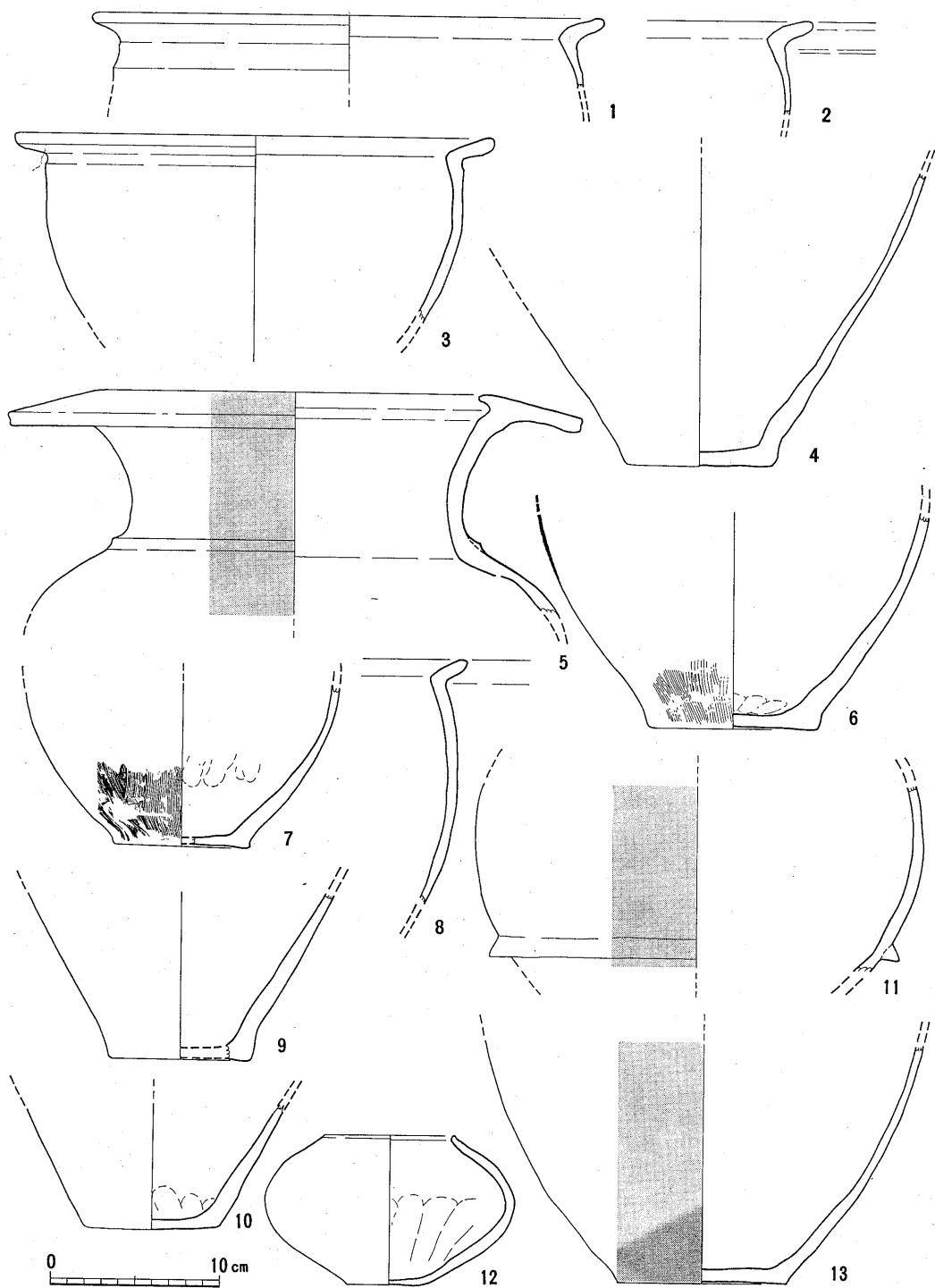
土器 1・2は逆L字状を呈す甕の口縁部である。1は口径28.6cmを測り、平坦部はやや内傾する。口縁下に三角凸帯を貼付する。2は口径31.4cmを測る丹塗りの甕である。胴部がやや張るものと推定され、口縁下にM字状の凸帯を貼付する。3は甕の下半で、底径8cmを測る。4も底径6.2cmの甕の底部である。6・7は鋤先状を呈す壺の口縁部である。6は口径25.6cmを測り、平坦面はやや外傾する。7も口径25.6cmを測る。平坦面の端部が外彎して延び、上面には推定4ヶ所に円形



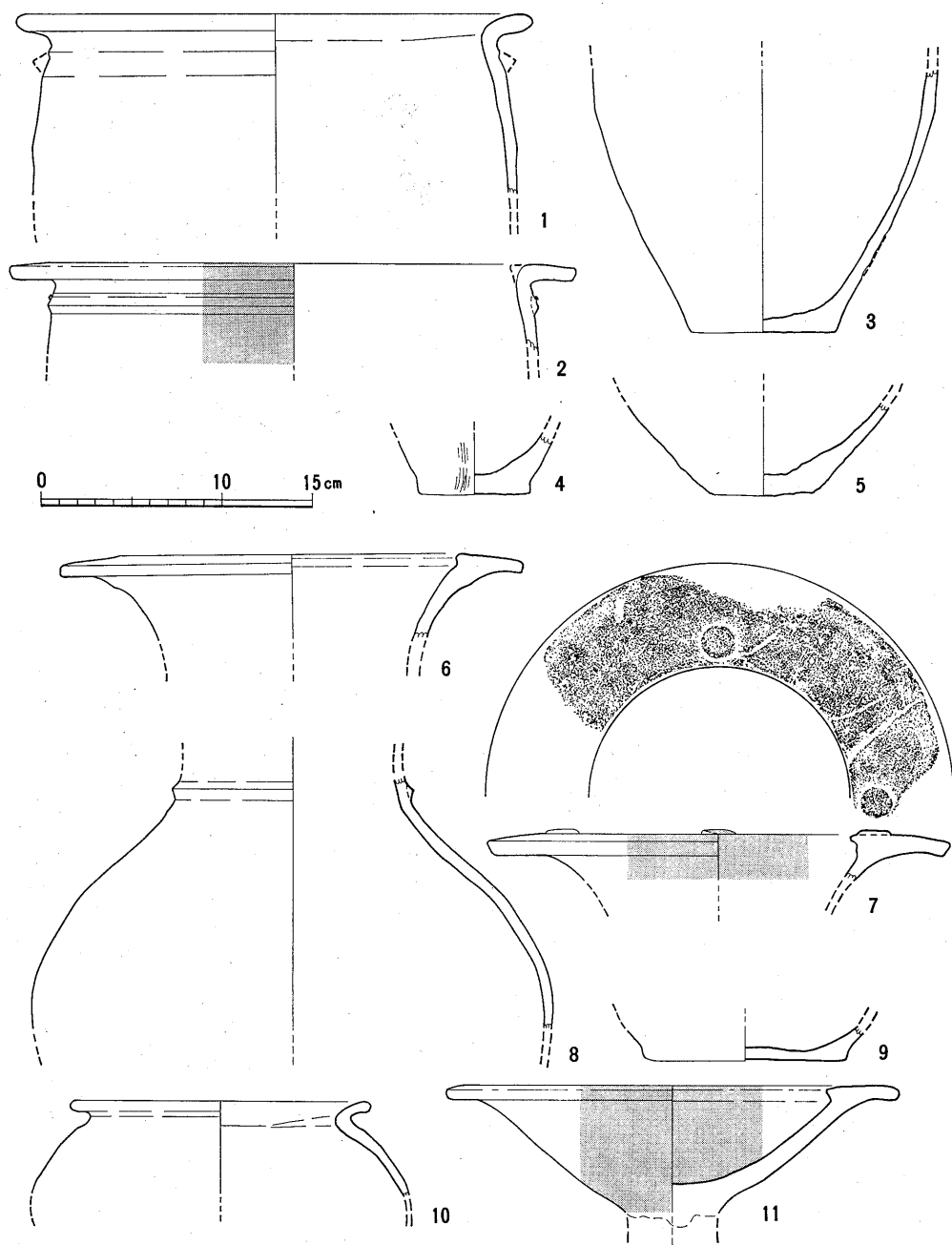
第16図 2号土壌実測図 (1/80)



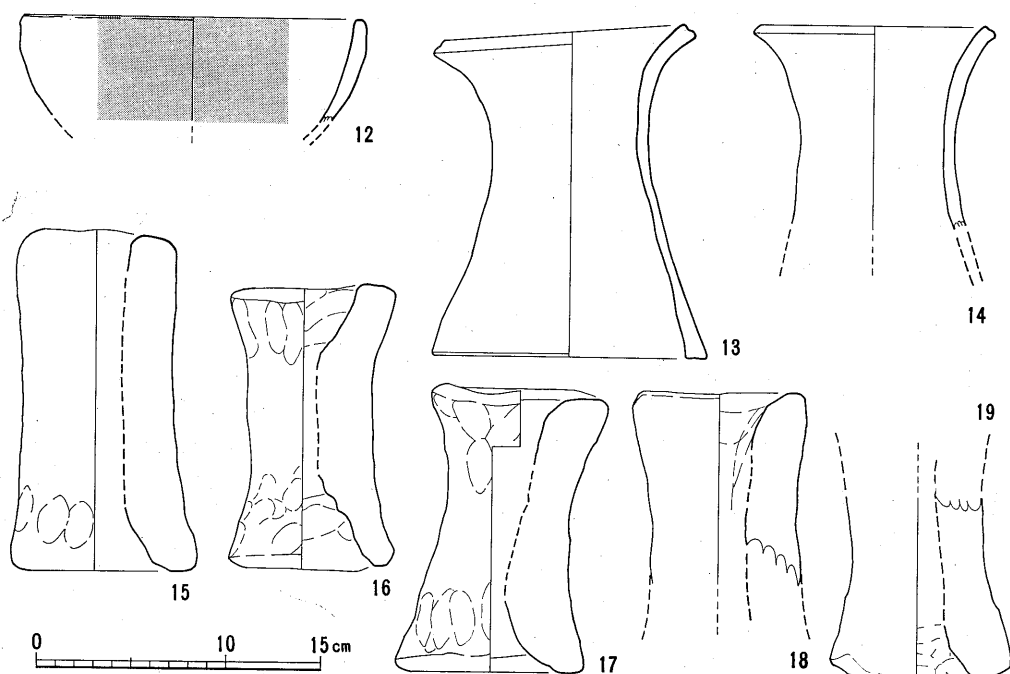
第17図 3号土壌実測図 (1/60)



第18図 1号・2号土坑出土土器実測図 (1/4)

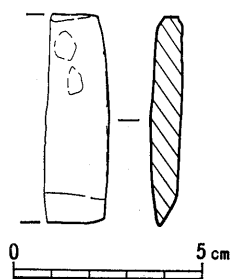


第19图 3号土坑出土土器实测图 (1/4)



第20図 3号土坑出土土器実測図 (1/4)

の浮文が貼付される。残存部全面に丹が認められる。8は壺の胴部上半である。張りの強い胴部によく締った頸部がつくもので、その境には三角凸帯を貼付する。5・9は壺の底部で、底径は5が5.4cm、9が11.2cmを測る。10は口径16.6cmを測る無頸壺で、口縁は深く折り曲った「く」字状を呈す。11は口径25cmを測る高杯の坏部で、口縁部は端部がやや下った鋤先状を呈す。器面には丹が塗られている。12は口径18.4cmを測る丹塗りの鉢で、口縁端部は上方に延びる。13・14は器台である。13は受け部径14cm、器高17.8cm、裾部径14.6cmを測る。体部上位にくびれ部をもつ。14は受け部径12.8cmを測る。15～19は支脚である。いずれも器壁は肉厚で、調整は粗い。15は上面径7.6cm、下面径9.9cm、器高18.2cmを測る。筒状を呈し、裾部が僅かに開く。16は上面径8.7cm、下面径8.8cm、器高15.4cmを測り、上下に開く形態を呈す。17も歪みはあるが16と同様の形態を示すもので、上面径9.8cm、下面径10cm、器高15.3cmを測る。18・19はそれぞれ下半・上半を欠失するが、18は上面径9.2cm、19は下面径4.8cmを測る。



第21図 3号土坑出土土器実測図 (1/3)

(11) 段状遺構

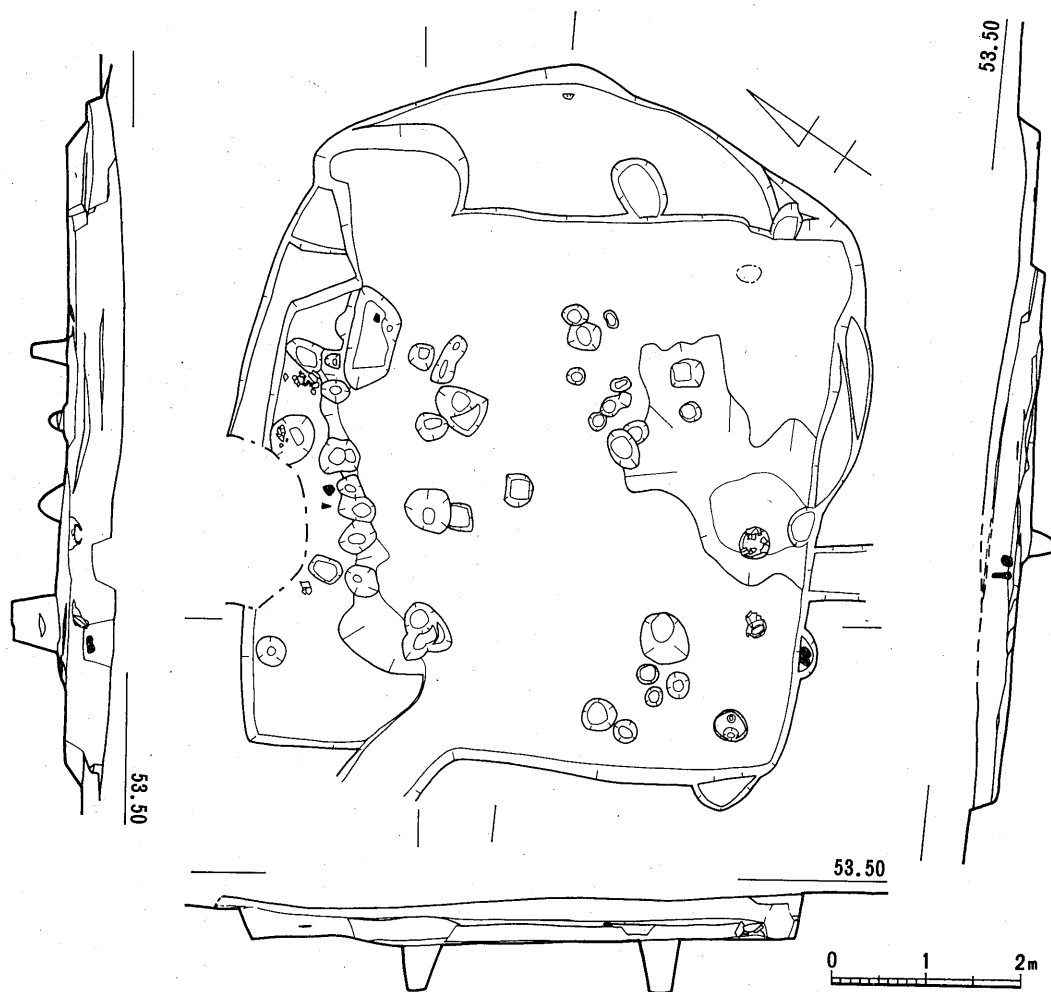
東側尾根基部の谷側に設けられる。地山を内反状に削り出したもので、最大比高1mを測る。出土遺物は弥生時代中期後半から後期を中心に、古墳時代前半までの土器小片が多い。

3. 古墳時代の遺構と遺物

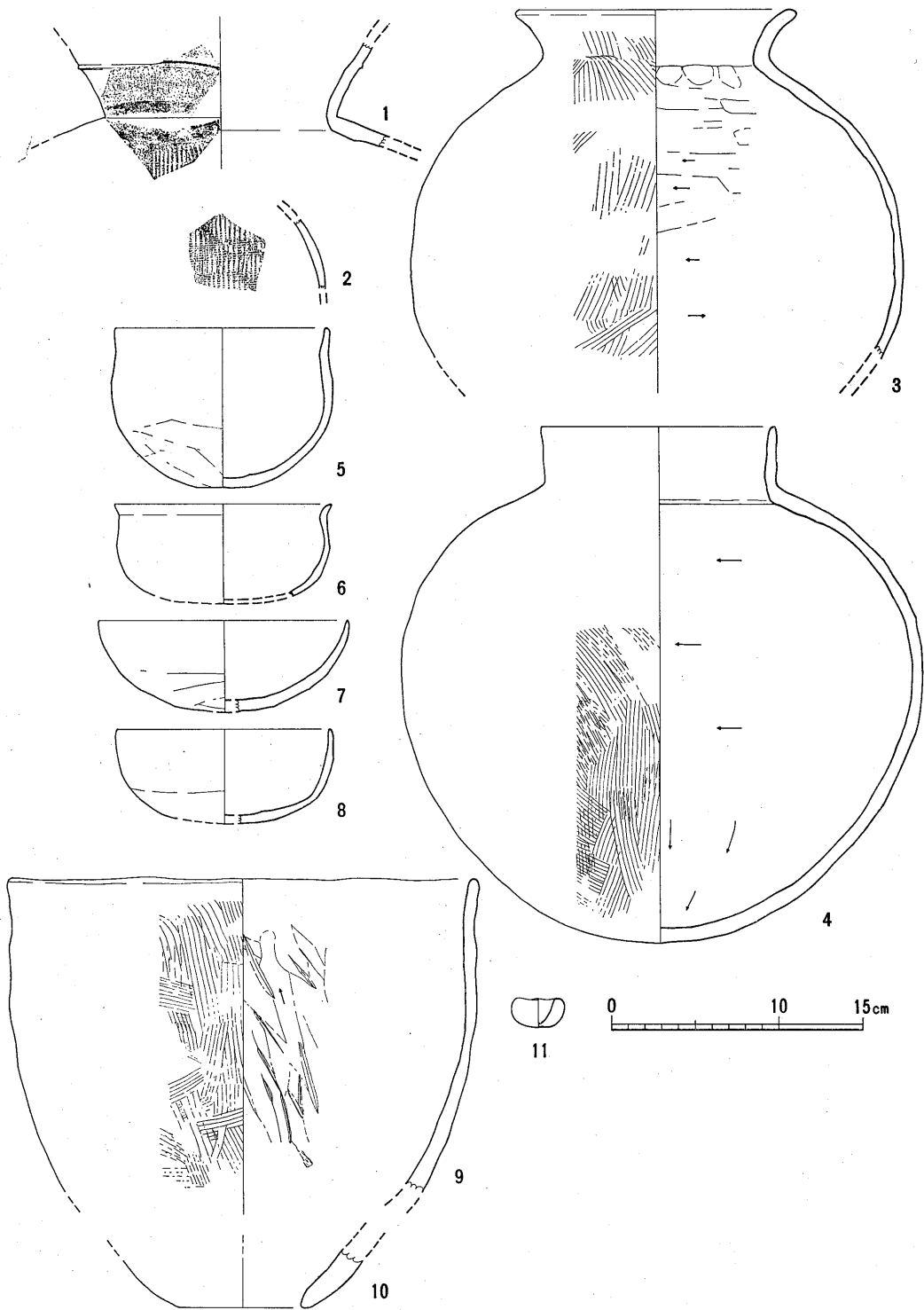
(1) 6号住居跡

7号住居跡を切る方形プランの住居跡である。規模は5.7m×6mを測り、支柱穴は4本である。南側の壁中央には、やや大きなピットがあり、壺(4)が出土した。また、その東側にも甕(3)が残っている。これに対面する部分に2個の立石があり、カマドがある可能性があったが木根により確認できなかった。この西側には甕(9)が、また東側には碗や赤変しススが付着した甕の破片が残っていた。

土器 1・2は須恵器の甕で、1は頸部から胴部への屈曲部周辺の破片である。頸部にはやや鈍い三角凸帯をめぐらし、その上下に波状文が施される。外面胴部には縦方向のタタキが施さ



第22図 6号・7号住居跡実測図 (1/80)



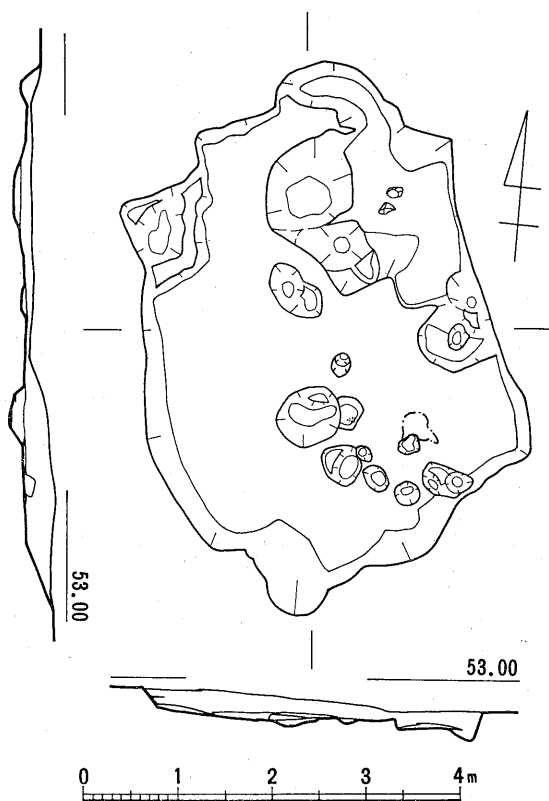
第23 图 6号住居跡出土土器実測図 (1/4)

れ、内面には残存する部分に限ってはナデ調整される。2は胴部上位の小片で、器壁は薄く4mm程度である。外面のタタキは縦方向の平行タタキの上を刷毛状工具による回転調整が行なわれている。内面はタタキを丁寧にナデ消す。3は口径17cmを測る。口縁部は外反し、その上半はやや外反度を増す。胴部は強く張り、球状を呈す。調整は口縁部内面が横方向、口縁部・胴部外面は縦方向に近い斜方向の刷毛目調整で、胴部下半は刷毛の角度が浅くなる。内面は横方向のヘラ削りが行なわれる。胴部中位から残存下端にかけてススが付着し、赤変が認められる。4は直口壺で、口径14.2cm、胴部最大径31cm器高30.8cmを測る。口縁部は短かく直立し、胴部から底部にかけて球状を呈す。外面胴部は縦または斜方向の刷毛目調整、内面胴部は中位以上で横方向、底部周辺で縦方向の刷毛目を施される。5は鉢で、口径13cm、器高9.5cmを測る。口縁部はナデ調整により、内彎気味にやや外傾する。胴部は僅かに張り、丸底の底部へ至る。底部は粗いヘラ削りが施される。6～8は碗である。6は口縁13cmを測る。口縁部が短かく外傾し、胴部が僅かに張る。7は口径15cm、器高5.5cmを測る。8は口径13cm、器高6.6cmを測る。7・8とも底部はヘラ削りが認められる。9・10は甗で、9は口径28.4cmを測る。外面は縦方向の刷毛目調整され、内面はヘラ削りを行う。10は底部で、穿孔は径7cmの円形である。9と同一個体になる可能性もある。

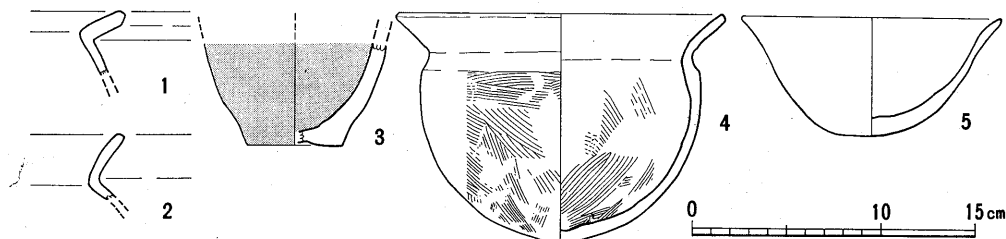
(2) 8号住居跡(第24図・25図)

竹林下の浅い位置にあり、遺構の残りは悪い。4m×3.5mほどの方形プランを呈すと思われる、主柱穴は2本である。東側壁付近から鉢(4・5)が出土した。

土器 1・2は甗の口縁部の小片である。3は壺の胴部下半で、底径5.2cmを測る。内・外面に丹を塗る。口縁部は外傾し、頸部は締る。胴部は半球状を呈し、底部はやや尖り気味の丸底である。調整は口縁部がヨコナデ、以下は刷毛目調整である。5は口縁13.9cm、器高6.3cmを測る。口縁部は外反し、



第24図 8号住居跡実測図(1/80)



第25図 8号住居跡出土土器実測図 (1/4)

胴部は直線的に内傾し丸底の底部へ至る。

4. その他の遺構

前述のほかにもピットや溝、性格不明遺構がある。1号溝はほぼ南北に走り段状遺構と切り合い関係にあるが、残りが悪く前後関係は不明である。2号溝は東側尾根頂部を走るが、遺存する部分は僅かである。3号溝は東側尾根西斜面を走る溝で、5号住居跡を切る。いずれの溝も時期を確定できる資料に乏しい。東側尾根東斜面には性格不明遺構がある。浅い段状を呈し、北部に焼土が認められる。住居跡の可能性もあるが、残りが悪く確定できない。

IV ま と め

弥生時代の遺構で比較的多くの遺物を出土したのは土壙で、いずれも中期後葉に比定しえよう。住居跡では、2号住居跡が床面から出土した土器によって中期末という時期が与えられ、5号住居跡は同じく中期中葉といえようが、後者の包土中から出土した遺物は中期後葉の土器である。3号・4号・7号住居跡は遺構、遺物ともに残りが悪い。最も遺物が残っていた4号住居跡も中期中葉から後期前葉までの遺物が含まれるが、周辺で同様の形態をもつ住居跡をみた場合、より古い段階に位置づけられており、今回の調査結果からは時期を確定しがたい。また住居跡中央に楕円形ピットをもち、その両端に柱穴をもつものは、韓国松菊里遺跡からの系譜^{註1}も考えられるという指摘もある。

古墳時代の6号住居跡は御床松原VI a 期^{註2}に比定され、須恵器も土師器とほぼ同時期と考えられる。7号住居跡は年代を確定しえる遺物に乏しいが、口縁部が屈曲する鉢は弥生終末期に位置づけられている門田遺跡辻田地区8号・18号住居跡^{註3}や三雲遺跡番上地区6号住居跡^{註4}の鉢形土器からの発展したものととらえ古墳時代初頭に位置づけたい。

註

註1. 合田遺跡 赤村文化財調査報告書第1集 1985 赤村教育委員会

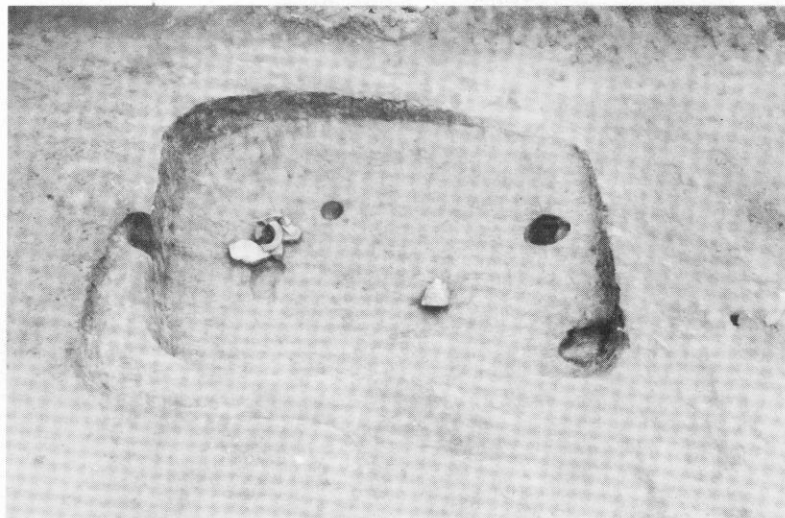
註2. 御床松原遺跡 志摩町文化財調査報告書第3集 1983 志摩町教育委員会

註3. 山陽新幹線埋蔵文化財調査報告第7集 1978 福岡県教育委員会

註4. 三雲遺跡Ⅰ 福岡県文化財調査報告書第58集 1980 福岡県教育委員会

図 版





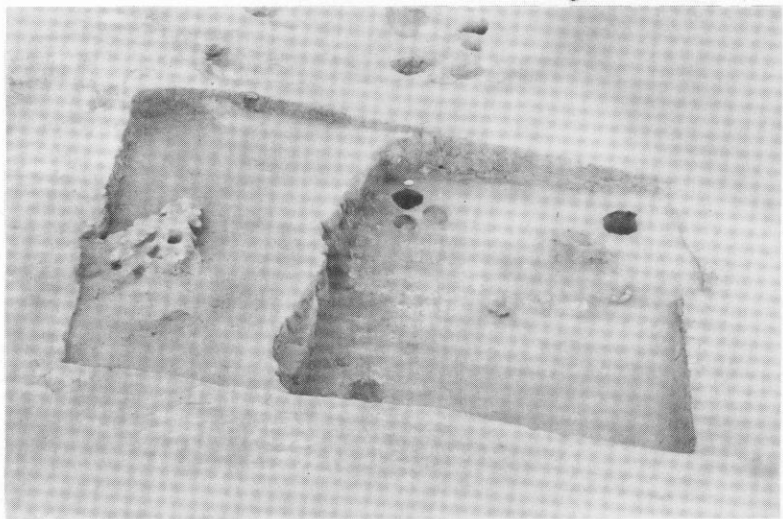
1号·2号住居跡



3号住居跡



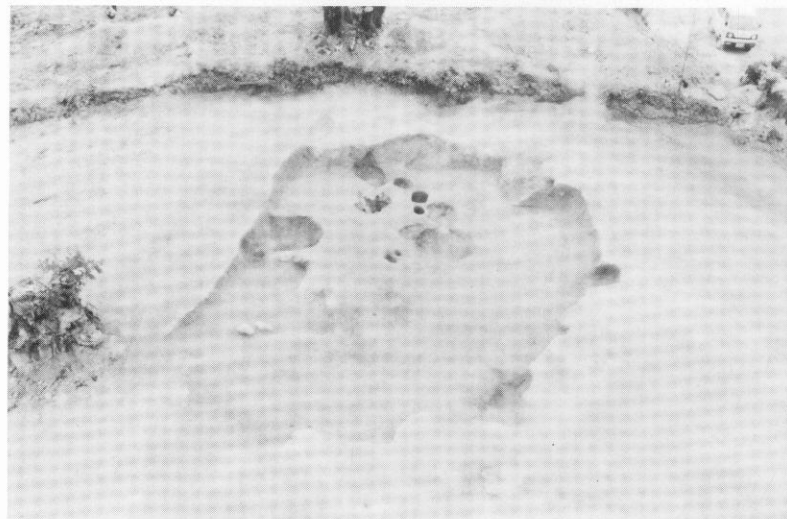
4号住居跡



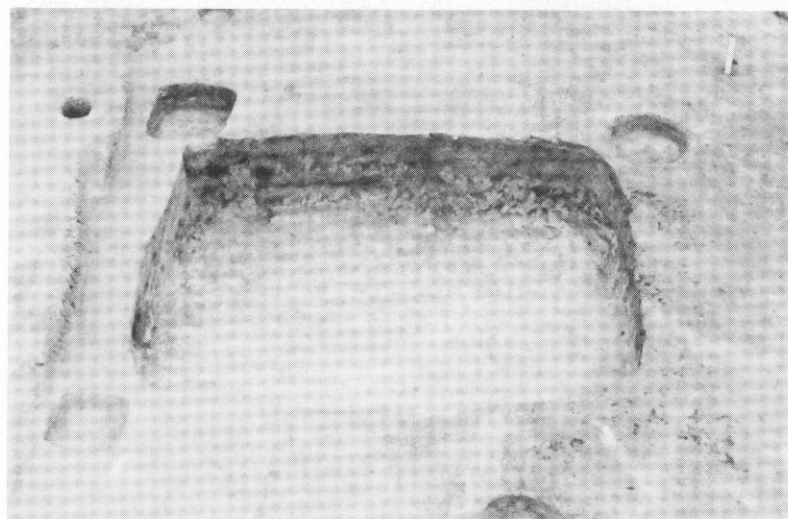
5号住居跡



6号・7号住居跡



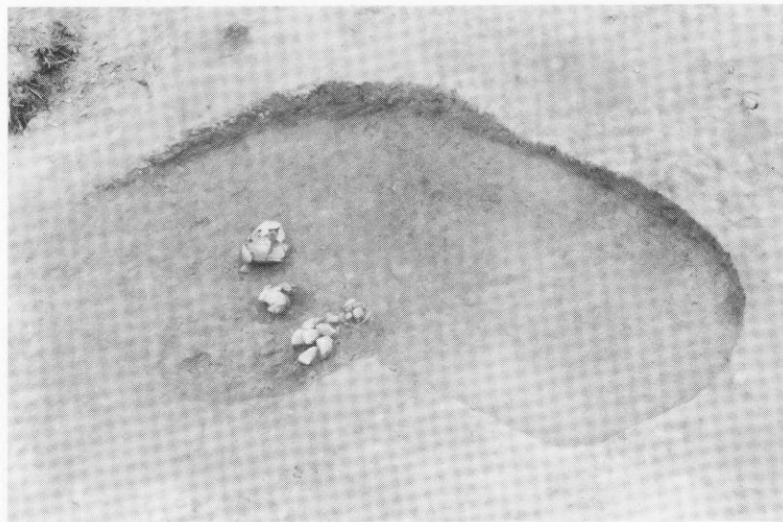
8号住居跡



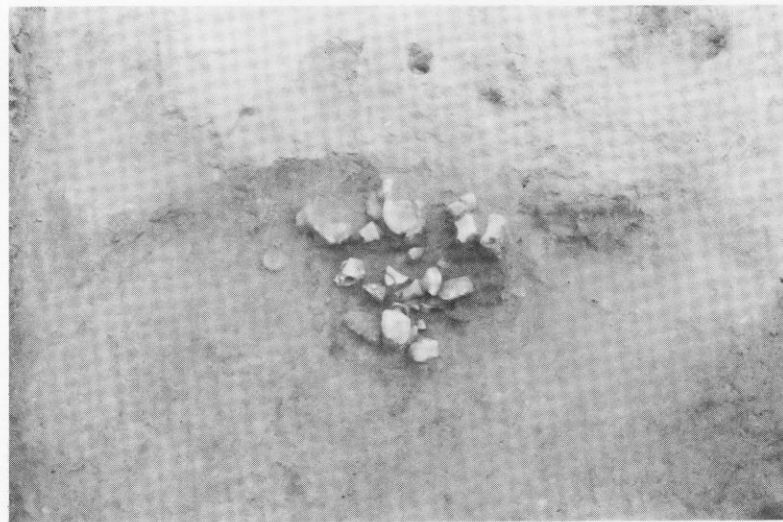
1号貯蔵穴



1号土壇



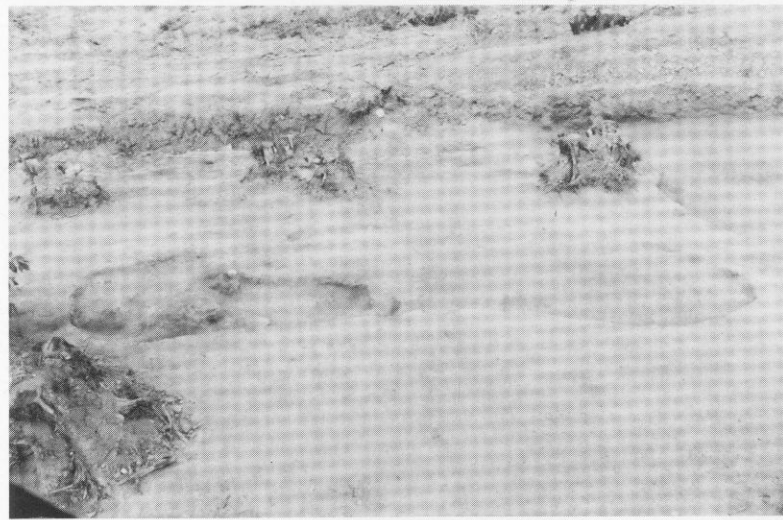
2号土坑



3号土坑



段状遺構

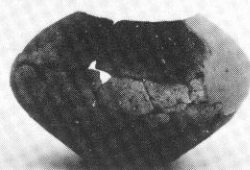


不明遺構

1, 2 号住居跡
2, 3 号住居跡



1



2

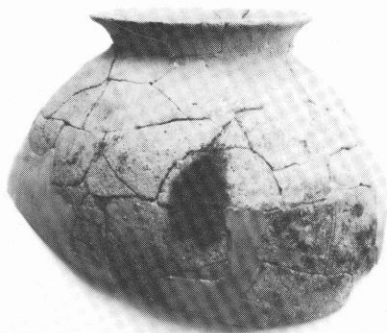


3



4

3, 5 号住居跡



6



5

4 ~ 7
6 号住居跡
8 · 9
8 号住居跡



8



9



7

10, 7 号住居跡
11 · 12
4 号住居跡



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19

13 1号土壇
14~19 3号土壇

脇 田 遺 跡 II

筑紫野市文化財調査報告書
第 13 集

昭和 61 年 3 月 31 日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
福岡県筑紫野市大字二日市753の1

印 刷 正 光 印 刷 株 式 会 社
福岡市西区徳永877の1